

その小屋は、麓から離れた場所にあった。

そもそも人が立ち入るような山ではないため、ここに小屋 があることを知る者はいないだろう。

お世辞にもきれいとはいえない外観だが、家としての機能はしっかりと果たしているようだ。

雲が多いせいか、月明かりが遮られ、辺りは暗い。 唯一の明かりといえば、小屋から漏れる、小さな小さなろ うそくの炎だけだった。





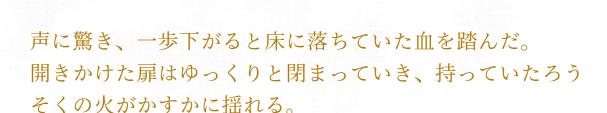




そんで見と







「けがを、してるんですか?」

「放っておいてくれ」

「そういうわけにはいきません。見せてください。もしひ どいようならお医者さんを……」

[111]

「でも」

「いいんだ。君は、ここに住んでるの?」

「――はい」

扉越しの会話は続く。

「そう。すぐに出ていく」

「血が滴るほどのけがをしてる人がなに言ってるんですか」

「すぐ治る」

「本当にそうなら無理せずここにいてください。その…… どうしても見せてくれませんか?」

「ああ」

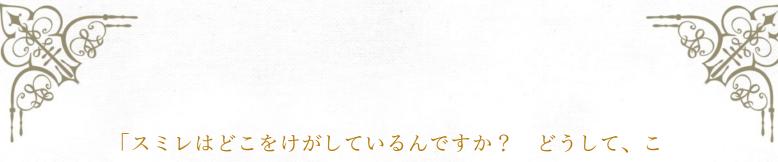
「わかりました。無理に見ないし、この扉も開きません。だから、せめてあなたのことを教えてください」

 $\lceil \cdots \rceil$

「私はマリー。あなたは?」

「……スミレだ」





こにいるんですか? |

「それを聞いてどうするの」

「扉越しでもなにかできることがあるんじゃないかと思っ 7

「声を聞く限り、マリーは若いだろう。できることがある とは思えないし

「これでも多少の医学は学んでいます。お料理も、少しな らできますし

それから、スミレの返答はなかった。 まだ質問に答えてもらっていないし、このまま彼を放って おくこともできない。 私はもう一度話しかけた。

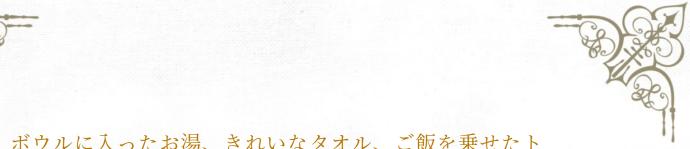


「とりあえず、ご飯を作りますね」

返事はない。

私は調理台をきれいにしてから、簡単なご飯を作った。 野菜スープに切った果物、ちょっと固いパン。 外にあった井戸から水を汲み、お湯も沸かした。





ボウルに入ったお湯、きれいなタオル、ご飯を乗せたトレー。

それらを扉の前に置き、トントントンとノックをする。

「ご飯と体を拭くためのお湯を用意しました。扉の前に置いてあります。私はロフトへ行きますから、よかったらどうぞ。……おやすみなさい」

ドア越しに伝えると、扉から離れ、ロフトへの階段をのぼった。

彼と同じご飯を食べ、ロフトにあるベッドに横になり、この日は眠ったのだった。



を押して、次のシーンへ進んでください。



